

# 虎

尾 上 柴 舟

王瑤は金持であつた。景色のいゝところに家をつくつてゐた。それを見ようと思つてよつて行く人が多かつた。その中に石生といふのがあつた。「西山に住んでゐる。」と云つて、いつもこゝで休んでゐた。五日目にはきつこ来る、瑤はそれと氣が會つたので、よく待遇をする。たゞその持物が山の中のものでないので變だと思つてゐた。ある時夕方歸らうとするので、

「あなたの御住居すまひに行つて見たいと思つてをりました。今日は御伴を致したい。」

と云ふ。

「私の居るのはひさしい山の中で、御尋ねになるやうなところではありません。」

と云ふ。

「いや今日は御伴をいたします。」

と云つてこゝをわのを構はずつて行つた、十里餘にもなつた。だんく暗くなつて來た。石生は、

「あなたはもう御歸りなさい。」

ミ云ふが、歸らうミしない。「歸れ。」歸らない。「ミ押問答をして猶ついで行くミ、石生は杖で地面に線を引いた。ミ急に深い壑たにがあらはれた。石生は俄に白虎ミなつて一聲高く哮えてふりかへつた。遙はびつくりして手で顔を被つて匍たひながら慌て、歸つた。

石生は再び來なかつた。

\*

王居貞は都を出たが、たゞ一人であつた。寂しいので、誰か話相手をミ思つてゐるミ、ふミ一人の道士が旅をしてゐるのを見付けた。傍によつて聞いて見るミ、自分ミ同じく潁陽に行くのだミいふ。いゝ道連だミ思つて、一緒になるミにした。ミころが、この道士は一日中何も食はない。

「ミかうかしたのですか。」

ミころが、

「咽のどが悪わるいので。」

ミ答へた。暮れてから宿に著いた。

寢る時が來た。枕に就いて燈あかりを消すミ、道士が起き上るらしい。さうするかミ見るミ、布囊ふくろをあけて一枚の皮を取り出して著て出て行つた。何處に行つたのかミ思ひつゝ眠つてしまつた。が音がするので、目を醒ますミ、明方近くなつてゐて、道士は歸つてゐた。

不思議な事をするものだと思つて、翌夜は早くから寝たふりをしてゐた。さうして道士が起きてまた布囊から皮を取り出して著ようさする。急に起き上つて、横から引つたくつた。道士はびつくりした。寄つて来て取らうとする。取られまいとして逃げる。逐つかける。また逃げる。さうしても返さない。道士はたうたう叩頭おびをしてしまつた。

「どうか返して下さい。ないさうまるのですから。」

「いや返しません。さうしてあなたは夜これを著て出るのです。それを話さない間はさうしても返しません。」

道士は弱つたが、

「實は私は人間ではありません。その皮を著て虎になるのです。晝は何も食ひません。夜になると、村中を歩きまはつて何か食ひます。その皮を被るかぶさ、一夜に五百里は走れるのです。」

居貞はびつくりしてしまつた。が長く故郷の家に歸らない。五百里も歩けるさう云へば、これを借りれば一寸の間に歸つて來られる。やつて見ようか。

「私が著ても走れますか。」

「走れますさうも。」

「それでは今夜貸して下さい。」

と云つて著るを、すぐ走り出された。ぎんぎん走つて百里餘来るを、ちやんご故郷が見える。家が見えて来た。家には別に變つた事がないと見えて以前のまゝである。で安心はしたが、深夜だから門がしまつてゐて這入る譯に行かない。立つて居る中に腹が減つて来た。

何か食ふものはないか。これからまた百里も歸るのは大變だが、と思つて見廻はしてゐるを一匹の猪が門のまゝに出て来た。

「いゝものがあるな。これで腹拵へをしよう。」

近よつてがぶりをやるを、大いに旨い。一口一口食ふに従つていよく旨い。食ひ盡くしてしまつたので腹は出来たが、門が明かないので仕方がない。ふり返りふり返り、故の道を歸つて、宿屋に着いた。

「御蔭で家へ歸つて来ました。これはお返しますよ。さうも有り難う。」

と云つて皮をぬいで道士に渡した。

旅から旅を重ねて、居貞は道士に別れて家に歸つた。皆な喜んで迎へたが、次男の顔が見えない。

「次男はさうした。」

「いふ妻は泣き出した。」

「大變なのです。先月の月初に、次郎は夜中に不意に起きて門の外に出たのですが、それ切り歸らないのです。出て見ますと、骨ばかりになつてゐたのです。ほんたうに悲しい眼にあひました。」

と切々に云つて泣き止めません。丁度道士から皮を借りた晩に當つてゐる。猪を思つたのは自分の子であつた。居貞は泣かうにも泣かれなかつた。

※

空はよく霽れて山の肌が美しい。その紫色をしたところに夕陽が落ちようとしてゐる。張逢はひきりいゝ氣持で、杖をふりながら山に向つて行つた。

麓に來ると、烟るやうな芝原が見える。近づくに緑の色が極めて鮮かである。その側にそば小さい樹がある。逢はうつこりとした氣持になつて、その樹に衣を脱いでかけて、體を芝の上に投げた。羽根蒲團のやうに柔かいので、全身が浮き上るこゝちがする。仰向になつて暮れて行く空を見てゐると、眠氣がさして來る。たうとう寢てしまつた。

何か響がしたと思つて目を明けるに、よほさ寢たらしい。心持がはつきりとしてゐる。が手を見るに、爪が伸びてゐる。不思議だと思つて足を見るに、これも爪が伸びてゐる。のみならず毛が一杯生えてゐる。すつかり虎になつてゐるのである。何處からともなく力が湧き上つて來る。飛んで見るに、高く體が上る。忽ち壑が越される。嶺も越される。全く電同様な速さだ。

遂に夜になつた。暗いところを歩き廻るにさすがに疲れて、餓が感じられる。村の方へ行けば何かあるだらうと思つて垣根に傍つて歩いて見るが、犬も豚も、馬も、何も見えない。困つたものだと思ふに一層ひも

じくなつた。

「あゝあれだ。あの話に聞いた鄭録事を食つてやらう。もう来る筈だから。」  
ミ道の側に隠れて待つて居る。

暫くして来る人がある。それに向つて来る人もある。

「鄭録事さんがもう來られさうなものだ。がさうだらう。」

「僕はよく知つてゐる。もう近い。」

「僕はまだごんな人だか知らない。間違つては具合がわるい。」

「三人一緒だが、綠色の著物のがそれだ。」

ミ話し合ふのを聞いて綠のをこ心がけてゐる。その中に一行が近く來る。綠色の人は肥満してゐる。昂然としてやつて來る。ぱつミ飛び出す。口にくはへて山に駈け上る。カ一ぱい走る。「あれあれ」ミ云ふばかりで逐つかけたものもない。嶺に達して、口から落ミして、頭からかじりつく。飢えて居るので味のいゝこきは非常だ。髪ミ腸ミは残して、あミはすつかり食つた。

腹が満ちたので安心して、林の中を歩き廻つた。が妙に物寂しくなつた。誰も伴ミするものもない。廣い寒い山の中に居るのはたゞ自分一人だ。何かないかミ見廻しても、たゞ林ミ岩ミ水の音ミ風の響ばかりだ。

こんな事で何の楽しみがあらうか。全體自分ほもミ人であつたのだ。それが偶然この姿になつたのだ。ミ

うかもミに歸りたいものだ。あの寝たミころに行つて見たら、何ミかなるかも知れん、ミ思ひつゝ尋ね廻るが、中々その場處が見出だせない。

が、さうかして見出さうミ思つて、一日中歩き廻るミ、日の暮に遂に到着した。着物はちやんミ樹にかゝつてをる。杖はちやんミ芝の上にある。芝は昨日のやうに柔かに煙つてゐる。懐しいので、體をその上に轉がすミ、自然に眠たくなる。眼を閉ぢて心を落ち著けるミたん、遠い國に行くやうな氣になる。

眠が足つて起きるミ、人の形になつてゐる。長い、こはい夢を見た氣持で、起き上つて着物を着、杖を持つて出たミころに歸つて來た。

家來は昨日から驚いて居る。主人が急に居なくなつた。方々へ聞き合はせて見た。山に行つたらしいミ云ふので、探して見るが、山路が八方に別れてゐるので、何方へ行つたのかさつぱり分らない、ミころへ歸つて來たので、大喜びだ。

「何處へ入らしやつたのですか。」  
ミ口々に問ふ。

本當の事も云へないので、

「山に行つたミころが、いゝ寺があつて、その和尚さんが、いろいろ佛教話をする。すきな事だから此方からも話して、遂に泊つてしまつた。」

云ふ。

「この邊には虎が澤山ゐるさうです。昨日も鄭録事といふのが食はれたのです。心配しましたよ。が御歸になつて大安心です。」

逢は變な氣持になつてしまつた。

逢はその後何事もなくつて、旅をして淮陽に行つた。その役人連が宴會をするので招かれた。

「今日は、皆な何か面白い話をして下さい。面白くない人には、罰盃ですよ。」

さ座長がいふ。さ順々にいろいろとお話をし出した。順が逢にまはつて來た。逢はしかたがない。また外にいゝ話もないので、虎になつて人を食つた。それが鄭録事であつたさ話した。

急に立ち上つたものがあつた。

「父の讎だ。覺悟をしろ。」

さ叫びながら刀を抜いた。

逢も驚いたが、座中の人は皆驚いて立ち上つた。

「何だ。何だ。何の事だ。」

さ大騒ぎになる。さその男は、

「自分は鄭還だ。録事鄭胤の子だ。食つたものは讎だ。」

ミ目を怒らして詰めよる。

「それは不思議だ。まあ静まれ。」

ミ皆よつて押へつけたが、遐の怒は止まない。遐は鄭將に訟へた。遂に勅令が下つた。

「遐は、淮水を渡らせて、また歸つて來させるな。逢は西に行け。姓名を改めよ。遐に逢はないやうにせよ。」  
こあつたので、遐は逢に逢はないこミゝなつてしまつた。

「父の讎は報いるべきだ。がそれを殺したのは無意識だ。逢を殺せば、遐は故殺で、また死なゝければならぬ。この讎は打たれまい。」

ミ人は云つた。